

## 狩俣の神々

——タービ・ピヤーンシをもとに——

新里幸昭

—

(一) まえおき

宮古狩俣の神歌を繙いていく時、言語の壁はもとより、季節ごとに繰りかえされる祭事・祭祀を司る神女やその周囲の人々、神歌に謡い込まれた神々についても、その素性を明らかにしなければならぬ。しかし、神事は禁忌であり、容易にその扉を開いてはくれない。向こう側から扉をあけてくれるのを待つ以外に方法がない。が、ここでは夏にうたわれるピヤーンシやタービを軸に、その登場する神々について管見していきたい。資料は『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』<sup>(1)</sup>を用いる。

## (一) 神の呼び名

ピートシやタービで、カミを、「うばでヤー」<sup>(2)</sup>「やぐみヤー」「やぐみょーい」「やぐみかん」<sup>(3)</sup>「かん」<sup>(4)</sup>「うい」<sup>(5)</sup>「ぬシ」<sup>(6)</sup>「しつ」と呼んでいる。「うばでヤー」<sup>(2)</sup>「やぐみヤー」<sup>(3)</sup>「やぐみょーい」<sup>(4)</sup>「やぐみかん」<sup>(5)</sup>は恐れ多い存在としての神であり、畏敬すべき神の意である。「かん」<sup>(6)</sup>は神、「ぬシ」<sup>(7)</sup>は主、「しつ」<sup>(8)</sup>は靈力を有する存在の神である。「やぐみかん」<sup>(9)</sup>「やぐみうふかん」<sup>(10)</sup>も、神の意である。

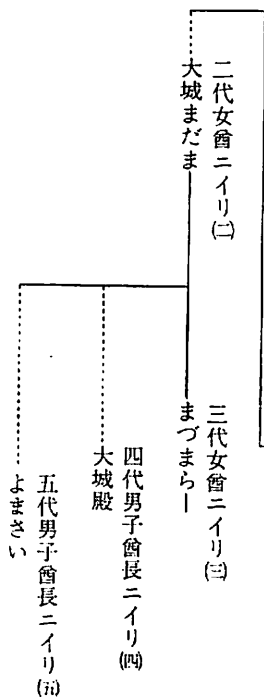
「かん」と呼ばれるカミを例にとると、それは、抽象的な自然神から具体的な神女まで含まれる。時には部落の民からカミと呼ばれる神女であり、時節や場所、祖先までその広がりを見せるのである。神の中の神<sup>(11)</sup>至高神を「かんぬばな(神の端)」<sup>(12)</sup>「ういぬばな(上の端)」<sup>(13)</sup><sup>(4)</sup>といい、祖神を「うやがん」(タ24八六)、子孫の神を「ふらがん」<sup>(14)</sup>「またがん」(タ20二五)といい、男神を「びきりやがん」<sup>(15)</sup>「さむりやがん」(タ28三九・四〇)と呼ぶ。その他、夫婦連れ添っている神を「みうとうがん」<sup>(16)</sup>「うちやいかん」(タ15二〇)という。

## (三) 研究略史・本稿目的

ところで、狩俣の神々の研究は、一九六二年の稲村賢敷『宮古島旧記並史歌集解』<sup>(4)</sup>がはじめである。稲村は「狩俣祖神のニイリ」<sup>(5)</sup>を分析し、次のようにその系譜を図式化し、説いている。

部落の始祖

初代会部創生神ニイリ(一)  
 天の赤星・太陽の子の真主——まやのまつめが……



その後は、ほとんど稲村論文の引用にとどまっている。

一九七四年、W・P・リーブラは、<sup>(6)</sup>沖繩の神々を「体系的叙述のために分類すれば、カミは五つの一般的範疇に分けることができる」としている。すなわち、

第一範疇は天および自然現象群とでも命名されるべきもの

第二範疇は場所に関するカミ

第三範疇は職掌または地位のカミ

第四範疇は先祖の霊

第五範疇はカミンチュ、すなわち、カミの靈が憑りうつっていると見られる人

である。W・P・リーブラが「確かにギリシヤ神話に見られるような神々の生活の記録というものが沖繩のカミにないことは明らかな事である」と説く。これに比し、狩俣の神々、祖先神は、その生活の断片を神歌に記録している。

ここでは、まず接尾敬称辞による形態的分類を行ない、W・P・リーブラの分析を参考にし、狩俣のピヤーンやタービに現われた神々にどのような神々がいるかをみていく。

## 二

### (一) 接尾敬称辞による形態的分類

接尾敬称辞で神々を形態的に分類すると、「テイラぬ大按司」のように「―大按司」、「マトウルギ親大按司」のように「―親大按司」、「平良親」のように「―親」、「父真玉」のように「―真玉」、「大主」のように「―主」、「大世主」のように「―主」、「朝餉・夕餉の真主」のように「―真主」、「大家主」のように「―主」、「ミエロ前」のように「―前」、「お籠根・真籠根御前」のように「―御前」、「父太陽」のように「―太陽」、「天加那志」のように「―加那志」、「母の神鳴響みヤー」のように「―鳴響みヤー」、「真屋のマーブ鳴響ん主」のように「―鳴響ん主」、「金殿」のように「―殿」、「クール大殿」

				接尾敬称辞	神々	神々の別称	特徴など
4	—御前 <small>うみまへ</small>	●お竈根真竈根お前 <small>うかまにまかまにう</small>		—太陽 <small>たいやう</small>	●父太陽・親太陽 夜太陽 <small>やたいやう</small>	夜月 <small>やづき</small>	父なる神、親なる神の意 で、男神。祖先神 月神
3	—前 <small>まへ</small>	●ミ—口前	お竈神 <small>うかまかみ</small>		●父真玉・親真玉 前真玉 <small>まへまたま</small>	前坐底 <small>まへひそ</small>	祖先神 祖先神
2	—真玉 <small>またま</small>		前坐底 <small>まへひそ</small>				
1	—太陽 <small>たいやう</small>						

のように「—大殿」、「車神くるまかみ」のように「—神」である。

接尾敬称辞を基に分類すると十七種である。このほか名前そのもので呼ばれる神々が存在する。後者の多くが祖先神と推定できる神々であり、透明度も高い。が、前者はかなり不透明な神々も混在している。オホナムチがオホクニヌシと呼ばれたように、同様なことが狩俣の神々でもみられる。接尾敬称辞で呼ばれる神々を表にすると次の通りである。

(神々の欄で「父太陽・親太陽」と記しているのは対語で同じ接尾敬称辞。神々の別称の欄も対語として用いられたもの。)

8	7	6	5	
<p>―主<small>みま</small></p>	<p>―親<small>おや</small></p>	<p>―親大按司<small>おやおほし</small></p>	<p>―大按司<small>おほし</small></p>	<p>接尾敬称辞</p>
<p>●野田神主<small>のた</small></p> <p>●大主・神主<small>おほし</small></p>	<p>●前真玉親<small>まご</small></p> <p>●平良親<small>ひらら</small></p>	<p>●マトウルギ親大按司</p> <p>●上の屋親大按司</p> <p>●漁が親大按司</p> <p>●金サ親大按司<small>かに</small></p>	<p>●テイラぬ大按司</p> <p>●親大按司<small>おや</small></p> <p>●漁が大按司<small>まじう</small></p>	<p>神々</p>
<p>磯座主<small>いざ</small></p> <p>まびらジが神</p>	<p>前坐底鳴響みヤ<small>まご</small></p> <p>平良殿<small>ひらら</small></p>	<p>磯の主<small>いざ</small></p> <p>鳴響ん主加那志<small>なやんし</small></p> <p>上ぬ屋マトウルギ<small>うぬい</small></p>	<p>テイラぬ大按司鳴響みヤ<small>うい</small></p> <p>上の子真主<small>うい</small></p> <p>上の主<small>うい</small></p> <p>マトウルギ</p>	<p>神々の別称</p>
<p>漁の神</p> <p>野田に坐す神</p>	<p>平良地方の豪族名</p> <p>「前真玉」に同じ。</p>	<p>祖先神</p> <p>漁の神</p> <p>祖先神</p>	<p>祖先神</p> <p>神の子の中で特にすぐれた神の意。</p> <p>身分の高いカミの中でも中心的存在。</p> <p>祖先神</p>	<p>特徴など</p>

主カシ●東主・繁栄の主あがみぬシ ばいん のシ飽かん主あかんぬシ磯座主いそざぬシ磯の主いそのぬシ大座主おほざぬシういか主・位主ういかぬシ くらゐぬシ●大世主・太陽世主おほよゆぬシ ていだゆぬシ●島ぬ主しまぬシ漆主しつぬシ銭ぬ主・金ぬ主せんぬシ かねぬシ地頭の主ぢちうぬシ所主ところぬシ●頭主かみぬシ大家主おほやしぬシ神主かみぬシ漁が主まづしぬシ漁が親大按司まづしぬシ大主おほしぬシ根ぬ世勝りねぬよきい世勝りよきい太陽世抱く神おほよゆぬシやぐみ神やぐみぬシ久葉良ばキくはらばき大神おほかみ車神くるまかみ大神おほかみやぐみよーいやぐみよーい踏鎖み神ふだみかみやぐみ神やぐみぬシ

東に坐す繁栄の神

立派な神の意で大家主の尊称。

漁の神をさす。

祖先神

豊穰豊年の神

祖先神

神酒の神

区域の神

10	9	
<p>—真主<small>まのし</small></p>	<p>—主<small>ま</small></p>	<p>接尾敬称辞</p>
<p>朝餉夕餉ぬ真主<small>あさいけふゆふいけぬまのし</small>      上の子の真主<small>うの上の子のまのし</small>      ●若坐りぬ真主<small>わかまのし</small>      百はーかキ八十ざーオキ<small>ひゃくはーかきやそじーおき</small>      真主<small>まのし</small>      家踏鎮みぬ真主<small>かふみぢんみぬまのし</small></p>	<p>根立て主・始め主      浜の主      真道主・門ぬ主      万座主</p>	<p>神々</p>
<p>テイラぬ大按司鳴響みヤー      山ぬフシラズ      大城殿<small>おほしろどの。</small></p>	<p>やぐみ大神      やぐみ神      やぐみ神鳴響みヤ      司神      金殿<small>かねどの</small>      金殿主<small>かねどのま</small></p>	<p>神々の別称</p>
<p>朝食夕食の神      祖先神      祖先神      家葺き針の神      祖先神である大城殿の尊称。</p>	<p>ある物事、特に祭事などを最初に始めた神をいう。      司神(神女のこと)の尊称として用いられる。豊漁の部落の東門に坐すニッジャ金殿という守護神。      祖先、道中の安全をも守る。祖先神か。</p>	<p>特徴など</p>



13	12	11
<p>— 鳴響みや —  <small>うりやう ひびき</small></p>	<p>— 加那志 —  <small>か な し</small></p>	<p>— 主 —  <small>ぬし</small></p>
<p>父真玉鳴響みや・親真玉鳴響みや  <small>ちちまことなるひびき おきなまことなるひびき</small></p> <p>● 大世主鳴響みや  <small>おほよねぬしなるひびき</small></p> <p>● ティラぬ大按司鳴響みや  <small>ていらぬおほいせなるひびき</small></p> <p>● 仲屋勢頭鳴響みや  <small>なつかやせどなるひびき</small></p> <p>● 前坐底鳴響みや  <small>まへざせなるひびき</small></p> <p>やぐみ神鳴響みや  <small>やぐみかみなるひびき</small></p>	<p>天加那志・上加那志  <small>てんかなし・かみかなし</small></p> <p>鳴響ん主加那志  <small>なるひびきぬしかなし</small></p>	<p>上ぬ主  <small>かみぬし</small></p> <p>大家主・頭主  <small>おほやねぬし・かみぬし</small></p> <p>金殿主  <small>かんでぬし</small></p> <p>漁ぬ主  <small>いさぬし</small></p>
<p>大陽世抱く神  <small>おほひるよにいだかみ</small></p> <p>上の子の真主  <small>うへのこまことぬし</small></p> <p>鳴響ん主加那志  <small>なるひびきぬしかなし</small></p> <p>前真玉親  <small>まへまことなるおきな</small></p> <p>根立て主  <small>ねたてぬし</small></p>	<p>金サ親大按司  <small>かみさおきなおほいせ</small></p> <p>仲屋勢頭鳴響みや  <small>なつかやせどなるひびき</small></p> <p>真屋ぬまぶくイ  <small>まことやぬまぶくい</small></p>	<p>ティラぬ大按司  <small>ていらぬおほいせ</small></p> <p>飽かん主  <small>あかぬし</small></p> <p>繁栄の主  <small>はるかにぬし</small></p> <p>漁が大按司  <small>いさがおほいせ</small></p> <p>門ぬ主  <small>かどぬし</small></p> <p>磯ぬ主  <small>いそぬし</small></p>
<p>「父真玉」に同じか。  <small>ちちまことなるおきな</small></p> <p>豊穰・豊年の神  <small>とよひねのかみ</small></p> <p>祖先神  <small>せんぜんかみ</small></p> <p>「前坐底」に同じか。  <small>まへざせなるひびき</small></p> <p>根立て主の尊称。  <small>ねたてぬしのたうと</small></p>	<p>祖先神  <small>せんぜんかみ</small></p> <p>祖先神  <small>せんぜんかみ</small></p> <p>祖先神  <small>せんぜんかみ</small></p> <p>祖先神  <small>せんぜんかみ</small></p>	<p>祖先神  <small>せんぜんかみ</small></p> <p>ニッジャ金殿のこと。  <small>にっじゃかんでのこと</small></p> <p>豊漁の神  <small>とよいさのかみ</small></p>

15	14	13	
—殿とうんの	—鳴響ん主 とうひょうんしゅ	—鳴響みヤ— とうひょうみや	接尾敬称辞
●大城殿	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 其屋のマーブ鳴響ん主</li> <li>② マバルマール鳴響ん主</li> <li>③ 世勝り鳴響ん主</li> <li>④ 金サビチ鳴響ん主</li> <li>⑤ 久葉良ばージ鳴響ん主</li> <li>⑥ 仲屋勢頭鳴響ん主</li> <li>⑦ 外間ダラ鳴響ん主</li> <li>⑧ あがイかに鳴響ん主</li> </ul>	母ぬ神鳴響みヤ— つかまぬかみとうひょうみや 司神鳴響みヤ—・祭り神 つかまかみとうひょうみや・まつりかみ 鳴響みヤ— とうひょうみや	神々
家踏鎮みぬ真主		やぐみ神 やぐみかみ アラカ杜司 あらかたに 川満原司 かわみづはら んみやオ原司 友利原司 友りげん 羽立原司 はねたてげん	神々の別称
祖先神	祖先神 祖先神 祖先神 祖先神 祖先神 祖先神 祖先神 祖先神 祖先神、未詳	神女 ・アラカ杜、川満原、んみやオ原、友利原、羽立原は地名。 ・狩俣では仲間元の神女をさす。	特徴など

16	15
<p>— 大殿 — 大殿</p>	
<ul style="list-style-type: none"> <li>● クール大殿</li> <li>● なり大殿・大神大殿</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 平良殿</li> <li>● 金殿</li> <li>● ニッジャ金殿・アロー金殿</li> <li>● 大ふぎ殿・神ふぎ殿</li> <li>● 世毎殿・分毎殿</li> <li>● 大世殿</li> <li>● おーぎ水殿・くるぎ水殿</li> <li>● 大穂世殿・神穂世殿</li> <li>● 種下ろしごとの殿地並み殿</li> <li>● 赤豆殿・生り豆殿</li> <li>● あかんが殿・ふきやぎんが殿</li> <li>● 清ぎ中子殿・白中子殿</li> <li>● びやーし声殿・いーな声殿</li> </ul>
<p>クールないシミヤー 神主が神</p>	<p>平良親 門の主</p>
<p>クール岬に坐す神 大神島の神</p>	<p>平良地方の豪族 ニッジャ金殿のこと 祖先神・守護神 祖先神 豊穰・豊年の神 豊穰・豊年の神 源泉の神 豊穰の神 発芽・豊作の神 赤豆の神 甘藷の神 胎児の神 神歌の神</p>

接尾敬称辞	17
神々	<p>―神<small>かみ</small></p> <p>威<small>い</small>部<small>ぶ</small>間<small>ま</small>神<small>かみ</small>・所<small>かみ</small>神<small>かみ</small>  威<small>い</small>部<small>ぶ</small>間<small>ま</small>神<small>かみ</small>・ビ<small>ビ</small>キ<small>キ</small>マ<small>マ</small>神<small>かみ</small>  お<small>お</small>竈<small>かまど</small>神<small>かみ</small></p> <p>所<small>かみ</small>神<small>かみ</small>・踏<small>ふ</small>鎮<small>ちん</small>み<small>かみ</small>神<small>かみ</small>  踏<small>ふ</small>鎮<small>ちん</small>み<small>かみ</small>神<small>かみ</small>・や<small>や</small>ぐ<small>ぐ</small>み<small>かみ</small>神<small>かみ</small>  大<small>お</small>和<small>わ</small>神<small>かみ</small>・や<small>や</small>ぐ<small>ぐ</small>み<small>かみ</small>神<small>かみ</small>  ●天<small>あま</small>照<small>て</small>らす<small>かみ</small>神<small>かみ</small>・大<small>お</small>御<small>み</small>神<small>かみ</small>  地<small>じ</small>頭<small>づ</small>ぬ<small>かみ</small>神<small>かみ</small>・や<small>や</small>ぐ<small>ぐ</small>み<small>かみ</small>神<small>かみ</small>  車<small>くるま</small>神<small>かみ</small>・金<small>かね</small>ぬ<small>かみ</small>神<small>かみ</small>  司<small>つかさど</small>神<small>かみ</small>・祭<small>まつり</small>りの<small>かみ</small>神<small>かみ</small></p> <p>百<small>ひゃく</small>神<small>かみ</small></p>
神々の別称	<p>ミ<small>ミ</small>ー<small>ミ</small>ロ<small>ロ</small>前<small>まへ</small></p> <p>所<small>かみ</small>主<small>かみ</small></p> <p>銭<small>ぜに</small>ぬ<small>ぬ</small>主<small>かみ</small>  浜<small>はま</small>の<small>かみ</small>主<small>かみ</small>  上<small>かみ</small>の<small>かみ</small>比<small>ひ</small>屋<small>や</small></p>
特徴など	<p>一般下級神女</p> <p>仲間元の神女</p> <p>車に関わる神</p> <p>外来神</p> <p>屋敷の神</p> <p>屋敷の神</p> <p>竈の神</p> <p>地域の神</p> <p>地域の神</p>

右表で●印を付したカミについて説明を加えていく。

1 「―太陽」は「山のフシラズ」と「テイラの大按司鳴響みゃー」の間にできた子と、月神に用いられている。その他「父太陽」は、父親の尊称として使われる時もある。

2 「一真玉」も三例のみで、祖先神らしい神に用いられている。

3 「一前」、4 「一御前」は竈の神だけである。

5 「一大按司」は、神歌のタービの主人公として謡われている「テイラの大按司」「上の屋マトゥルギ」という祖先神にだけ用いられている。

6 「一親大按司」は先述した「上の屋マトゥルギ」と「漁が親大按司」に用いられている。後者は、「志立元のビヤーン」では、「まどがボジ」「うやボジ(親大按司)」、「ビヤーンの威部間声」では「漁が主」「磯ぬ主」、「東山の祓い声」では、「漁が親大按司」「磯の主神」と謡われている。従って、磯の神・漁の神である。具体的にどの祖先神をさすか未詳。

「上の屋親大按司」は「上の屋マトゥルギ」ともいう。「大城元のビヤーン」や「上の屋マトゥルギのタービ」に謡われているが、タービに比し、ビヤーンでは、その素性を明らかにすることはできない。ただ、「親大按司」と敬称で呼ばれる祖先神とされている。「上の屋」は部落の上手に立地する地理的形勢から出た屋号である。その家のマトゥルギという意味である。タービによると彼は、威部間の神、屋敷の神として坐すようである。

神歌では、次のように説く。彼が五歳の頃漁に出かけた(旅嘉例・沖嘉例をとった)。大海で暴風に遭遇し、流れついたところが唐の国であった。その仮りの宿においても立身出世し、妻をめとり、頭衆・旦那衆になったのである。しかし、帰郷の念深く、帰ることになった。その条件として、牛を殺

し、おみきを拵え、祭祀をすることであつた。

口碑によると唐で、その妻が知恵を授けた、といふ。一は、タービにあるように牛を拵げ、祀りを行なうこと。二は、唐の風習に違反し、長に勘当してもらふこと。即ち食物の入った皿を箸で、あるいは煙草盆をキセルで手元に寄せることを妻の父の目前で行なうことだといふ。その策によつて帰郷した祖先神である。

7 「一親」は神歌タービで主人公として謡われている「平良親」「前真玉」だけに用いられている。おそらく狩俣の祖先神ではなからうか。「平良親のタービ」に、

セビさうやうやや

平良親親は

ビさらとうぬとうぬや

平良殿殿は

へにーぬゆまさいどう

根の世勝りは

ういかなシかんどう

ういか主神は

丸あがイぞーんびゅーりよー

東門に坐つてね

ウあーらぞーんびゅーりよー

上手の門に坐つてね

とある。「どう」を「ぞ」と解するなら「平良親」は「根の世勝り」ということになる。「は」として「平良親」を謡い込むためのタービに対句的に用いられるという不自然さが生ずる。「平良親」の

業績は、「前の井」「向かい井」を掘り、石積みしたことがタービにある。一方、「狩俣祖神のニール」では、機織りの名人マジマラーの布を略奪しに来た人物で真屋のマブコイとたたかった人物にも「平良殿」がいる。同一人物なのか別人なのか、その判断はさけない。

「前真玉」は、タービに謡われているものの、その素性は不明である。ただ創成神の正しい血筋を引く子孫の神「ふらがんどやりば（子供の神であるから）またがんどやりば（股神であるから）」と記されているのみである。

8 「一主」は「大主」「神主」「野田神主」だけである。「大主」「神主」は「大座主」「磯座主」ともいい、前述した「漁が親大按司」同様、漁の神のようである。後者は、野田部落地域に坐す神のようである。

9 「一主」は漠然として東方に坐す神から祖先神、場所の神、豊穰・豊年・豊漁の神、神酒の神、神女まで幅広く用いられている。

「島ぬ主」といわれる「久葉良ばキ」について述べていく。

「大城元のビヤシ」では「くばら大按司鳴響ん主」、「志立元のビヤシ」では「くばらばぎ鳴響ん主」、「仲嶺元のビヤシ」では、「くばら大按司鳴響ん主」、「東山の被い声」では「くばらばキ」という。

『宮古島紀事』中の「狩俣こまらはひ靈術を行なうこと」の記事や『宮古島旧記』の「糸敷大按司、

従弟飛鳥爺がために仇を報ぜし事」は、この神に関連する記事である。それによると、小真良はいは琉球の津堅村の人で、妹とふたり宮古に駆け落ちしたようである。最初は白川浜に住んでいたが、戦乱が多いため狩俣の遠見台の地に住居を構えたようである。連れてきた妹は石原城の思千代按司に嫁した。その後、思千代按司やその子の獅子真良が糸数按司に射殺されたので、その仇を、呪術を用いてうつ。また倭人から槍を呪術でとりあげるなど、呪術や占いに秀でていたと記されている。なお狩俣部落の東門、中門、西門を構え、部落の周囲に石垣を築いたのも彼の事績であり、それ故に「島の主」としてまつられている。

10 「―真主」は食事の神と家葺き針の神、祖先神に用いられている。

「若坐りぬ真主」と呼ばれる「山のフシラズ」は、そのタービがある。正しい血筋の「ふらがん」  
 「またがん」(子孫の神)であり、狩俣の前の家の大家の万座に小さな家を、まず初めに建てた。それから大城元の屋敷の長さや幅を計り、山を薙ぎ払って後、息をひきとった、とタービに謡い込まれている。若くして死んだため「若坐りの真主」と称されているようである。一方、口碑によると「山のフシラズ」は、蛇であるが若い男性に姿を変え、テイラの大按司(大城真玉)という女性のもとに狩俣のイスガー(磯井)近くの岩穴から夜毎通い、契りを結んだ。そして子供を生んだという。その子が父太陽と称される祖先神である。

11 「―主」は二人の祖先神「テイラの大按司」「ニッジャ金殿」と豊漁・繁栄の神に用いられて



いる。

12 「一加那志」は、漠然とした神の尊称と、鳴響ん主加那志と称せられる三祖先神「金サー親大按司」「仲屋勢頭鳴響みヤー」「真屋ぬまぶくイ」の別称の敬称として用いられている。

13 「一鳴響みヤー」は祖先神と豊穰・豊年を賜われる神、神女の神号の敬称として用いられている。

「ティラの大按司鳴響みヤー」は「上の子の真主」「上ぬ主」とも呼ばれる。「大城元のピヤーン(男)」や「ティラの大按司のタービ」に現出する。

神歌では、「男神であり、土神であり」狩俣の祖神の正しき血筋を引いた「ふらがん(子等神)」「またがん(股神)」であるとする。即ち、子孫神である。どのような事績を残した神であるか、詳らかでない。ただ、ティダ(太陽)でなく、ティラということだが、ガマ(岩穴)と関りをもった祖先神を祀った自然の墓穴であるとするなら、そこに祀られている祖先神という可能性もでてくるが不詳。前述した「山のフシラズ」の子を宿した「ティラの大按司(大城真玉)」とは別人のようである。タービでは男神であり、口碑では女神であり、違いがある。

「仲屋勢頭鳴響みヤー」は、そのタービもあるが素性や事績も不明な祖先神のようである。

14 「一鳴響ん主」と呼ばれる神々は、皆祖先神のようである。

「真屋のマーブ鳴響ん主」は、真屋の真誇りとも称せられ、タービやニリーに謡い込まれている。

タービでは、正しき血筋の子孫の神であると記されているだけである。「狩俣祖神のニリー」では、大城真玉の娘マジマラーを、「ならぶばが（自分の叔母が）うやぶばがチミヤーン（親叔母がために）」と言える関係にあったようである。機織りの名人マジマラーの織った布を、下地の奴達や平良親が奪いに來たので、自分の刀を抜いて戦い、相手をやっつけ、その名声が宮古中、沖繩までもなく根島まで鳴響んだ英雄神として紹介されている。

「マバルマール鳴響ん主」は、ニリーに出てくる大城真玉の長女「マバルマ」の別名か、未詳。

「世勝り鳴響ん主」は、口碑によると「根の世勝り」の別名という。「根の世勝り」については、大城元や仲嶺元で謡うタービがある。そして、狩俣禿嶺（うげんみ）にその威部があり、東門東南に祀られる聖域がある。

「根ぬ世勝り」も「大城真玉」の子である。正しい血筋の子孫であり、神の中の神として敬われていたようである。そして禿嶺に住居をかまえた男神である。東門の上で百弓、八十弓を抱いて外敵を追い払ったようである。それだけでなく東に坐す神（あづなつかは）として、昼夜警護に当り外敵を退けている。部落の子孫が年老いても歩行の安全を守る。海から入ってくる疫病も防ぐ。立身出世するように学問の世界でも守護してくれる神としてタービで謡われている。ニリーでは、禿嶺に大屋敷を造り、後には船も造る。交易のため布や糸をたくさん積み、那覇に行く。そして御主天（うしゅてん）（首里の王か）に積荷を進上し、多大な褒賞にあずかったと謡われている。そのニリーに「久貝主（くがいぬし）の早船は」「御船主の早

船は」とあることから、別に、このようにも呼ばれていたとも推測される。

「金サビチ鳴響ん主」は「大城元のビヤシ(男)」に謡い込まれた人物である。

三 ゆまさい とうゆんしゅー 世勝り(神名)鳴響む主を

なーやーぎょーい 崇べよう

三 かにさびち とうゆんしゅー カニサビチ(金殿)鳴響む主を

なーやーぎょーい 崇べよう

と、記されているだけであり未詳。名前から鉄具と関わりをもった祖先神ということが、推定されるだけである。大城元のアブンマがうたう「金サー親大按司のタービ」の主人公と同一人物だ、と仮定しても、正しい血筋をひいた子孫神と謡い込まれているだけである。

「外間ダラ鳴響む主」「あがイかに鳴響ん主」も祖先神らしいが、未詳。

15 「一殿」は部落に攻めてきた英雄的人物だけでなく、部落の祖先神や自然現象に関わる抽象的な豊穰の神や具体的な豊穰の神までに付される。「との」「とうぬ」「どうぬ」は「大城殿」「平良殿」「金殿」、「どうん」は「金殿」をはじめ「大ふぎ殿」の祖先神をはじめ「世毎殿」ゆかいどうんなど豊作に関わる神の敬称である。

「大城殿」は別名「家踏鎮みぬ真主」と称せられる。「家踏鎮み」は、家屋・家庭だけでなく部落の礎を築き、繁昌させていくという呪的な意味を含む。その神が「大城殿」ということになる。「大

城殿のタービ」では、「やふだみぬまぬシ」「ふらがんどやりば」「またがんどやりば」と、あるだけである。「だが狩俣祖神のニーリ」の四章と呼べる部分では、彼の業績が謡い込まれている。すなわち、部落共同体の繁栄を約束する井戸を、彼が中心となって開掘していくのである。それ故に、部落繁栄の英雄的人物として位置づけられているのである。

「金殿」は「門の主」「ニッジャ金殿」「アロー金殿」「東成金あしな金がに」「上手の成金ウツあしちな金がに」とも称せられる。前述した「根の世勝り」と同じく、狩俣部落の守護神として、「ニッジャ金殿のタービ」に謡い込まれている。

「大ふぎ殿」は別に「神ふぎ殿」と呼ばれ、「カニャー大司」と夫婦神である。「ふぎ」を老婆たちは「陰囊」と解していた。これまでその解釈に従ってきたが、「首」にしたほうがよさそうである。「狩俣祖神のニーリ」に

一〇まんみ うき

真胸に受け

まふぎ さぎみーりば

真首にさげてみると

とあることや、「真津真良のフサ」に、

咒まんみ うきていーみゆりばよー

真胸に受けて着けてみると

まふぎ うきていみゆりばよー

真首に受けて着けてみると

とあることにもよる。また、共時態の狩俣方言で、「首」は「ふぎ」であり、「陰囊」は「ふぎイ」で

ある。それ故、並みはずれて首の太い男神のようである。

「大ふぎ殿」は夫婦一緒に船旅に出たようであるが、暴風にあい、「御主天」の元に流されてしまった。その門前で七泊八日して、うたを謡っていたら「御主天」の娘にお茶をご馳走になった、というところが、彼を謡ったタービにあるのである。

「大世殿」は「大世主」「太陽世主」に同じく豊穡の神である。豊かな幸福をもたらしてくださる抽象的な神をさす。五穀豊穡にとどまらず、子孫繁栄、家畜の繁殖をもたらしてくれる神である。

「世毎殿」は「分毎殿」と対語である。五穀など、その時節時節をたがわず、その折りごとに豊穡をもたらしてくださる神である。

「おーぎ水殿」「くるぎ水殿」は、人間生活にとって最も大切な水が、清らかでいつもあふれるように次から次へと湧きでてくるように、約束してくれる神である。

「大穂世殿」「神穂世殿」は麦粟黍などのように穂のある作物の豊穡の神。

「うらシなみ殿」「地並み殿」は、種子を下ろすと、そのたびに見事に発芽させ、豊穡を約束してくれる神。

「赤豆殿」「生り豆殿」は小豆の豊作をつかさどる神であり、「あかんが殿」「ふきやぎんが殿」は甘藷そのものをさすと同時に地上に吹きあげる程甘藷の豊作を約束する神として「殿」が付されている。「清ぎ中子殿」「白中子殿」も胎児そのものをさすと同時に母体ですくすく育っている胎児が美し

くすこやかに生まれることを約束する神である。

「びゃーし声殿」「いーな声殿」は、神歌のビャーシを見事にうたわしてくれる神である。

16 「―大殿」の付された神は、場所に限定されている。クール岬に坐す「クール大殿」と、大神島に坐す「大神大殿」「なーり大殿」だけである。素性は不明であるが、おそらく航海とかかわりがありそうである。

17 「―神」は場所の神、外来神、職掌に関する神、神女の神名として用いられている。

ここでは「天照らす神」「大御神」について説明を加えていく。

仲間元のウヤバーが謡うタービの一つに「天照らす」がある。これによると、「天照らす」は、一番初めには大和で、丸蚊帳・張り蚊帳の中で穏やかに、心の底から喜びに満ちた生活をしていた。丸蚊帳・張り蚊帳を所有する程すぐれた神であった。そこで、狩俣の「母の神鳴響みゃー」が懇望し、四元の神の一人としてお招きしたのである。外来神として位置づけられている。

## (二) 名前そのもので呼ばれる神々

祀られている祖先神の中には、名前そのもので呼ばれる神々がいる。「八重山ウシメガ」「ザウンガニ」「マーシミガ」「バシクイのバソ」「サジナンガバイ」「舟んだき司」「頂の磯金」「マギチミガ」などが、それである。各々がタービの主人公になって謡い込まれて居り、それを軸に略述していく。

## 「八重山ウシメガ」

「八重山ウシメガ」は、八重山で名高かった女性であった。そこで喜びに満ちあふれた（みやこしゅーい）生活をしていた神であった。が、狩俣部落の祖先神「テイラの大按司鳴響みゃー」に懇望され、心を通じ合い、夫婦になった神である。そのため、父親に勘当されたが、牛を船に積んで狩俣の磯井の地に上陸したようである。「テイラの大按司鳴響みゃー」の母親と盃を交し、親子の縁を結んだようである。涙を流しながら姑と語っていた様子をみて、その後、「テイラの大按司鳴響みゃー」はいろいろと虐待もしたようである。三人の子供もでき、すっかり八重山のことも忘れてしまった頃、ウツァ原で牛を盗られてしまい、息たえていった、とタービには謡われている。牛盗人の間で闘争があったことが想像される。その後、姑が三人の子供を立派に育てたので、宮古が永久にある限り子孫の主であってほしい、と結ばれている。そのような祖先神として、タービには位置づけられている。

## 「ザウンガニ」

「ザウンガニ」を謡ったタービそのものさえ脈絡をつかむのが難しい。神女の話しに頼る以外はない。彼女は盲目でありながら、五人の子、七人の子の母親であった、といわれる。そして五人目、七人目の子を、赤血を垂らしながら産んだようである。その子を、「ザウンガニ」の長女がとりあげ、

生きたまま上の屋の屋敷に埋め殺した。踵で土を踏みつけて殺したため、長女の踵は朽ちていったようである。その母親が「ザウンガニ」である。

「マージミガ」

「マージミガ」は「かんぬさー（神の誘い子）」とも称されることから、セヂ高く早世し、女神となった方である。父親の言いつけで、しかたなく池間の人に嫁いでいったようである。心細い思いで嫁になったが、「マージミガ」は姑に虐待されてしまい、神になった（死んでしまった）ようである。神になった彼女は、狩俣の冬祭りの時は池間島の東嶺の岬に逃げて行って、そこで狩俣の神々と向かい合い、神歌を謡い踊っているというのである。そのような経歴の神としてタービにある。

「バンクイのバツ」

「バンクイのバツ」は、身寄りのない貧乏人であった。砂川を治めている大家（族長）の甘藷を盗もうとしているところを見つかってしまったようである。その際の応答のやり方——わたしが盗んで食べたなら、体全部を差しあげよう——がすばらしかったので、逆に取って食べなさい、と讚美された祖先神としてタービに謡われている。



「サジナンガバイ」

カニヤ元の「サジナンガバイ」のタービの主人公であるが、どういふ経歴の持ち主なのか素性がはっきりしない。子供がなく、阿且嶽の嶺（砂岡の嶺）で没したようである。子孫の皆に美しい御用布の上納をさせてください、ということばから、機織りをつかさどる女神と推察されるだけである。

「舟んだぎ司」

志立元と仲嶺元のタービの主人公である。父親に隠れて男と夜這いごとをしていたが、それがバレて父の怒りをかい、勘当されてしまう。米・粟・麦・豆・黍・辛大蒜・葱・胡椒などの種子を船に満積して、男と子守り姉とともに船出。そして狩俣の地に着いた。鳥の羽が濡れているのを見て、泉を発見。その近くの仲嶺に住居を構える。その後、志立元にも家を建てた、という。神女達の話によると、女と男は妹と兄であり、久米島から渡って来たのだ、という。それ故に、五穀の神、水の神として崇められている。

「頂ジビの磯金」

志立元のタービに謡われている鍛冶神で農業神である。村人が鉄篋など鉄製の農具がなくて素手で農業を行っていた時、鉄塊を大和から搬入し、鍛冶屋を始め、農具を広めていった祖先神である。

「マギチミガ」

仲嶺元のタービに謡われている女神である父親(父太陽)に、天から中島(島)に降りてニッジャ金殿(アロー金殿)の許で宿取りをするように言われ、彼女はその命に従う。が、ニッジャ金殿が荒ぶる男神であるため、宿取りができない。そのことを天に戻り父親に報告する。そしてニッジャ金殿と一緒に居ることはできないので、その了承を得るのである。そして狩俣の前の井(井戸名)に、神のお殿を構えたようである。また、村人の御用布や藍染めやすべての祈願も叶えてくれる神として、タービに謡われている。

三

ここまで狩俣のタービやビヤーンにてくる神々を不十分ながら分析しみてきた。W・P・リーブラが説くカミの範疇でくれないカミが、この狩俣の神歌の中に存在するということが言えるのではないだろうか。ギリシヤ的な神ではないが、生活の断片を神歌の中に確かに記録しているのである。

〔後記〕

『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』をひらいて下されば、どのタービやビヤーンにはどの神々が出てくるということが明白なので、いちいち出所を明らかにしなかった。

注

- (1) 外間守善・新里幸昭編。角川書店。一九七八年六月三十日。
- (2) 「うばでヤー」は「やぐみヤー」の対語として用いられる。例が極少である。
- (3) (タ13一四)は『南島歌謡大成Ⅲ宮古篇』の13番のタービ。即ち「13根の世勝りのタービ」の一四節をさす。(ピ2六)の場合は、2番のビヤーン「<sup>しだていひょう</sup>2志立元のビヤーン」の六節をさす。以下同じ。
- (4) 琉球文教図書株式会社。一九六二年十二月十日。
- (5) 「狩俣祖神のニリー」を「大城元のニリー」とよぶべきである、とする乱暴な意見もあるが、その人達は、このニリーが伝承されてきた組織や歴史を追究すべきである。現在でこそ、このニリーをうたう規模が小さくなったものの、二〇年以前は狩俣部落の五五歳以上の男性はすべて、各自の元で祭事をすませ、ニリーをうたうために、大城元の神庭に集ったことや、大城元が大城元だけの元であるばかりでなく、狩俣部落全体の元であることを識るべきである。
- (6) 『沖繩の宗教と社会構造』崎原貢・崎原正子訳。弘文堂。一九七四年四月二五日。
- (7) 注(6)に同じ。
- (8) 注(1)の同書を参照。
- (9) 一九六九年八月の狩俣部落調査で、故平良マツさんや前里カマドメガさんの話による。以下の「口碑による」も同様。